有機溶剤乱用者に関する心理学的考察

―ロールシャッハ・テストによる―

山脇　成人・嶋谷　勝弘・津久江一郎

広島医学 Vol. 35 No. 6 1982 別冊

有機溶剤乱用者に関する心理学的考察

—ロールシャッハ・テストによる—

山脇　成人[1]・嶋谷　勝弘[2]・津久江一郎[3]

I．は じ め に

わが国における最近の薬物乱用の主流は，覚醒剤とシンナー・ボンドなどの有機溶剤である。前者は終戦後の第一次覚醒剤乱用期(いわゆるヒロポン時代)に続く第二次乱用期を迎え，その常用による幻覚・妄想のための通り魔殺人事件などが大きな社会問題となっている。後者は昭和40年頃から，フーテン族，ヒッピー族を代表とした青少年の間で爆発的に流行し，その後しばらく衰退していたものの最近になって再び，中学・高校生の間で増加し，非行，学力低下などの教育上の問題ばかりでなく，精神医学的にも軽視できない。

覚醒剤乱用に関する臨床精神医学的，心理学的研究は比較的多いのに対し，有機溶剤乱用に関する臨床研究は，竹山[8]，中村[4]，小田[5]，Yamawaki[11]などが行っているにすぎず，心理学的研究はほとんどない。今回我々は，有機溶剤乱用者16名に対して，ロールシャッハ・テストを施行し，その結果について心理学的考察を加えたので報告する。

II．対象および方法

対象は，広島市内の精神病院に入院中の16名の有機溶剤乱用者(男14名，女2名，16〜25才)である。

それぞれに，ロールシャッハ・テストを個別法で実施し，採点した。

なお，16名のうち8名(表1のcase No. 1，5〜7，11〜14)は，覚醒剤，鎮痛剤などを併用する多剤乱用者であった。

III．結果および考察

(1) 反応領域について

表1に示したように，反応領域については16例すべてが，全体反応(W)優位の傾向を示している。W反応は，高い形体水準と結びつく場合，素材を組織化し，部分を関係づけ，抽象的，論理的な事に関心を払う能力を反映するものであると考えられている。しかしながら，16例の中にそういった良形体質の反応が出現することはまれで，ほとんどが普通，あるいは未分化なW反応であった。

このようなW優位という結果から，細部に関心を払わない漠然とした現実認知という有機溶剤乱用者のパーソナリティ特性が推測されてくる。また，「普通の形体水準と結びついたWの強調は，能力によって裏づけされていない野心を示す。」という Klopfer, B.ら[3]の論述も興味あるものと言えよう。

(2) 運動反応

運動反応の中でも，とりわけ人間運動反応(M)は，ロールシャッハ・テストの中でも重要なスコアリング・カテゴリーの1つである。M反応は，①運動感覚の投影をする点から，自分の内的資質を自由に働かせる想像性，②人間像を認める点からは他者への共感性，③高度の知覚を必要とする点から，高い現実吟味の能力，を反映するものであるとされている[2]。要するにM反応は，高い自我機能の水準，自己，自己の衝動，空想を受け入れる能力，良好な対人関係の維持などを示すものなのである。

表2に示したように，全体的にM反応は少なく，しかも0〜1を示す場合が9例認められる。この事は，上記のような傾向の欠如，精神生活の貧困さに基づく自我の弱さ，社会的適応性の低さなどを示唆していると考えられる。

(3) 形体反応

16例中8例がF%50以上を示している。形体反応(F)は，客観的な対象の認知能力を示すものであるとされているが，前述の Klopfer は，F%が50以上を越える場合は固さと収縮性 (constriction) が考えられると述べている。収縮性とは，外的刺激に対する反応性，内的な精神活動を共に抑圧して，極めて消極的，表面的に外界に適応していこうとする傾向を意味して

[1]Shigeto Yamawaki, [2]Katsuhiro Shimatani, [3]Ichiro Tsukue: Psychological aspects of organic solvent abusers – Rorschach Test –. [1]Department of Psychiatry, Kure National Hospital (Director: Teruo Okamoto), [2]School of Medical Rehabilitation (Psychology), Kure National Hospital, [3]Senogawa Mental Hospital.
[1]国立呉病院精神科（主任：岡本輝夫医長）
[2]国立呉病院附属リハビリテーション学院（心理学）
[3]瀬野川病院

表1　反　応　領　域

Case No.	Age	Sex	T.R.	W	D	d	Dd	S
①	21	♂	15	12	3			
②	16	♂	21	14	6	1		(1)
③	23	♂	15	9	5	1		(1)
④	19	♂	14	11	3			
⑤	21	♂	9	7	2			
⑥	19	♂	19	10	7		2	(2)
⑦	22	♂	11	6	4		1	
⑧	21	♂	12	11	1			(1)
⑨	16	♂	9	6	3			
⑩	16	♂	20	18	1		1	
⑪	17	♀	22	11	11			
⑫	22	♂	13	12	1			
⑬	21	♂	20	12	7			1
⑭	23	♂	13	13	0			
⑮	17	♀	19	13	4	1		1
⑯	25	♂	12	8	4			

表2　決　定　因

Case No.	M	FM	m	KF	FK	F	Fc	C′	FC	CF
①			(1)	1		12				2
②	1	4	1(2)		(1)	9		2(1)	(1)	4(2)
③						10		1	2	2
④	2	2				5		(1)		5
⑤		1				4		2		2
⑥	2	2			2	11		1	1	
⑦	3	2				6				
⑧	1	2	(1)	1		6				2
⑨	2					6				1
⑩	1	3(1)	(3)	1		7		6(1)		2(2)
⑪	2	1				19				1
⑫	1	1	(2)	1		6		3(1)		1(1)
⑬	1	4	(1)			13		(1)	1	1
⑭	1	4	(1)			4			1	3
⑮	6	5(1)				5			1	2(1)
⑯	2	5				3				2

注）（ ）内の数字は付加反応数を示す。

いる。F%が50以上を示す例の運動反応，色彩反応の出現率を考慮すれば，この解釈は了解できるものである。

また，16例中10例に不良形態反応（F–）が認められたことは注目に値する。F–反応は病的な反応であり，精神障害者（特に精神分裂病）のロールシャッハ・テストにおいて，しばしば見られる反応である。有機溶剤乱用者におけるこの種の反応の出現は，彼らの現実吟味，検討力の弱さ，それに伴う現実への顕著な適応障害を示していると言わねばなるまい。

(4) 表面材質反応

表面材質反応（Fc）もロールシャッハ解釈においては比較的重要なカテゴリーである。Klopfer は，Fc反応は他者との深い情緒的接触，信頼的依存関係を示すものであると述べており，片口[1]は，繊細な感受性を示すものであるとしている。

シンナーの乱用を始めたのは15才の時で，好奇心から吸い始めたと言う。その頃は月に1～2回であったのが，最近では使用頻度が激増し，ほとんど毎日のように吸っていた。「シンナーを吸っている時の幻覚は，幻視が主であり，ポスターの絵が動く，自分が月に行って歩いているような気がする，日の出と日の入りと共にシンナーを吸うのがなんとも言えない，音楽をかけたり，テレビを見ながら吸うと自分がその中に入りこんで主人公になったような気がする」といったような状態が次々と出現した。

そのうちに，こういった状態に慣れてしまい，もっと先の幻想状態を望み，死との境地をさまよう気分を味わってみたくなった。そのため，首を吊る格好をしてみたり，手首を切ったりしてシンナーを吸った（自傷行為の出現）。シンナーを吸っている時は，それらの行為が全く恐ろしくなかったと言う。兄もシンナー乱用者であり，同じようにテレビを見ながら首を吊る格好をしていて，そのまま死亡したらしい。

少年院を出た当初，覚醒剤を使用したこともあり，5～6回射ったが，声が聞こえてきたり，車のテールランプがパトカーに見えてきたりで，恐怖心におののき，自分には合わないと思い，止めている。

今回の入院時は，シンナー（500ml）7本を買って車で山に入り，3日3晩吸い続け，自分で助けを求めて警察に出頭したということである。

（2）ロールシャッハ・テスト記録

Ⅰ．∧7″ オニの面に見えますね。
W,S F+ Mask 1.0
それだけです。Put C imp.
キャッチャーがかぶる面に見えますね。
（黒い感じの色彩から。）
W,S FC′ Mask 1.0
ちょうにも見えますね。
（黒いからがのような感じ。）
W FC′ A P 1.0
1′10″

Ⅱ．∧∨∧∨∧ 何にも見えませんねェ。
単なる……imp. 何にも見えません。
rejection
56″

Ⅲ．∧14″ 人が向かい合ってたき火をしているように見えます。（赤い火があって）
W M,CF H,Fire P 1.5
骨があるでしょ……。そのように見えます。人間の…あの1部分に見えますねェ。（色は別にして，骨盤のような。）
W F+ Bone 1.0
55″

Ⅳ．∧ 何でもないですね。答えようがないです。
imp. 1′15″しいて言えばウルトラマンに出てくる怪獣ですかね。（黒っぽいところと足。）
W FC′ (A) 1.0
1′24″

Ⅴ．∧3″ こうもり……。（触角と羽根。パッと見て黒い。）
W FC′ A P 1.0
ちょうちょ。（色は別にして，大体そういう雰囲気）
W F+ A P 1.0
がですね。（色は別にして，同じような形してますから。）
W F+ A P 1.0
20″

Ⅵ．∧ ただのものにしかすぎないですね。imp.
見えないです。
rejection
1′04″

Ⅶ．∧31″ 火が消えた後の煙みたいなもんですか。
（黒の色が薄く，上にあがっているような感じ。）
W KF,C′F,m Smoke 0.5
ちょっと見えにくいけど，ウサギが向かい合ってる感じですね。
D FM A 1.0
1′07″

Ⅷ．∧ 何にも見えないですね。何とも言い難いです……。imp. 何にも見えんです。
rejection
1′47″

Ⅸ．∧7″ たき火をしているところです。たきび……炎いう感じです。（とんどいう感じですね。）
W CF,m Fire 0.5
28″

Ⅹ．∧20″ ただの模様にしか見えないですね。2つに折った……。（ただ，インクを散らしたいうだけですね。）
W F Ink 0.5
36″

Total R＝13　W＝12　D＝1　S＝(1)
M＝1　FM＝1　m＝(1)　KF＝1　F＝6
C′＝3 (1)　CF＝1 (1)　rejection＝3（Ⅱ，Ⅵ，Ⅷ）

（3）考　察

反応総数は13と少なく，外界に対する建設的な意欲，生産性を欠いている。特に，反応拒否（rejection）がⅡ，Ⅵ，Ⅷカードに認められる。この事は，急激な情緒刺激を外部から受けたり，複雑な状況に直面したりすると，それらを適切に処理できず，回避してしまう傾向を示唆している。各カードに要する反応時間が短かいのもこれを裏づけていると言える。

表2からも明白なように，有機溶剤乱用者については，16例すべてがFc反応欠如を示している。この事は，上記のような感受性の欠如，信頼的対人関係の未発達，愛情的刺激の拒否，抑圧などを示唆するものであると言える。そして，これらを根底において規定するものとして，家庭環境，両親の養育態度，幼少時の情緒的発達などにおける問題が，当然推測されなければならない。

(5) 色彩反応

運動反応が，精神内界の様相を示すものであるとすれば，色彩反応は，環境からの刺激に対する反応性，行動の傾向などを示す対照的な反応である。

本報告の結果では，全体的に未分化な色彩反応(CF)が優位であることがわかる。CF反応の内容は，「火」「血」「花」が圧倒的に多く，加えて16例中12例がFC<CFを示している。これらの結果は，有機溶剤乱用者の衝動的傾向，情緒的統制の弱さ，自己中心性，外界に対して受動的で影響を受けやすい傾向などを提示していると考えられる。

(6) 陰影反応，通景反応

陰影反応(FC′)は，16例中8例に出現している。この事は，有機溶剤乱用者が比較的外的刺激に対しては敏感で，一応の対人的疎通性を有していることを示していると考えられる。

また，通景反応(FK)については，わずか2例に認められただけであった。拡散反応(KF)も，5例に見られたにすぎなかったが，その内容は，「煙が上がっている」「雲」などであり，現実感のない漠然とした不安(浮動的不安……floating anxiety)を感じさせるものであった。

(7) 反応内容その他

反応内容とその分布，およびポピュラー反応などについては，一貫した顕著な特徴は認められなかった。

Ⅳ．事　　例

これまで述べてきたことをさらに確認するために，我々は非常に興味ある有機溶剤乱用の一事例をここに提示し，そのロールシャッハ・テスト記録を分析，検討してみたい。

(1) 生 活 歴

M.N.，♂，22才。

2人兄弟の次男として出生。幼少時には特に問題はなかったという。中学校に入った頃より，家出をしたり，授業を抜けだしたり，他校の学生とケンカをくり返すなどの非行が目立ち始めた。高校へ進学するも，電話の応対が悪いということで人を刺し，殺人未遂事件となって，1年で退学，1年7カ月の少年院生活を送っている。

両親は放任主義で，本人も別に家庭に対して不満はなかったと言う。ただ，父親はかなりのギャンブル好きだったらしい。母親は，家庭に閉じ込もりがちの普通の主婦であった。本人は「友人関係に問題があった」と自分で述べている。

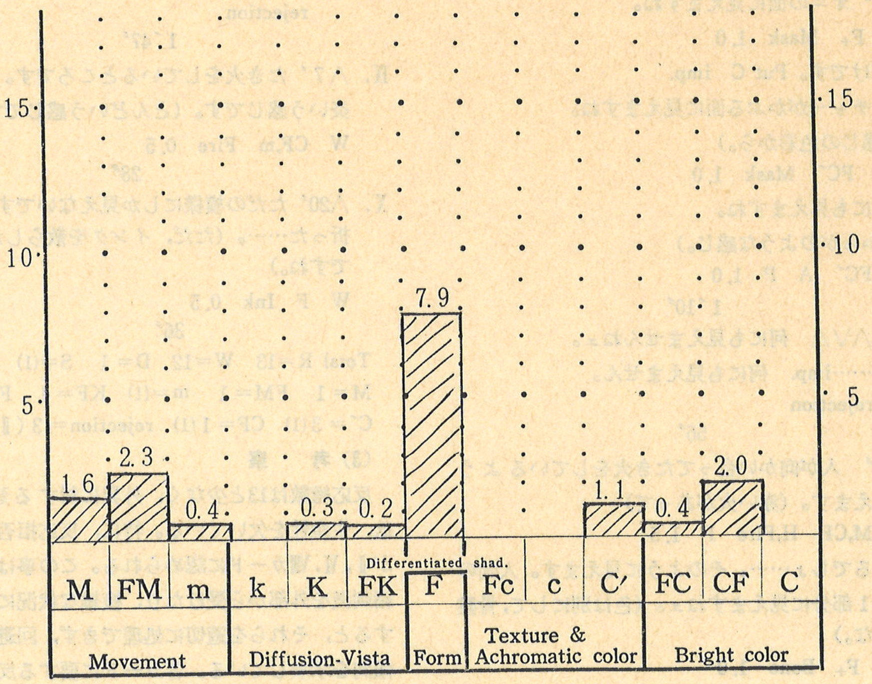

図1　有機溶剤乱用者の平均サイコグラム

反応領域は圧倒的にW反応優位で，しかもポピュラー反応や形体性を欠いたもので占められている。現実認知の未分化さが，ここに明示されている。

M反応数は1で，それもⅢカードのポピュラー反応のみであり，前述してきたような自我の弱さに基づく社会的適応性の低さ，内的な精神活動の低さを示している。そのため，外的刺激に対する反応性も，能動性主体性を欠いたものであり，粗野な行動が出現しやすいと考えられる。この傾向を如実に示しているのは，2つの（1つは付加反応）「火」という CF 反応である。

Fc 反応は全く認められず，生活場面における信頼的関係の未確立，affective contact の欠如を示している。Ⅵカードの rejection は，このような観点から見れば，愛情的刺激の拒否という傾向を表わしているとも解釈できる。

FC´,C´F反応は，比較的よく出現しており，CF反応数よりも多い。これは，外界への敏感さと同時に，やはり現実場面に対して引っ込み思案になっていることを示すものである。なかでも，最も特徴的な反応はKF反応と結合したⅦカードの「火が消えた後の煙」という反応である。この反応は，建設的な自我機能の低下に基づく現実感覚の低下を明確に示している。Ⅹカードの「ただの模様にしか見えない」という極めて意欲を欠いた反応もこの傾向を裏づけるものであろう。

この事例は，自傷行為という特異な行動によって特徴づけられるものであるが，上記のような観点から考察を進めると，現実感覚に根ざした適応機能が著しく低下した状態の中で，シンナーは状況回避に基づく自己表現の場であり，さらに自傷行為は，稀薄化していく自己の極限的な確認行為ではなかったのだろうか。

V. ま と め

以上，個々のスコアリング・カテゴリー，事例について分析，考察を加えてきたが，最後に，ロールシャッハ・テストから見た有機溶剤乱用者のパーソナリティ像について総括的にまとめると以下のようになる。

①自我が弱い。感情や衝動のコントロールを場合に即してできない。

②易刺激的で，主体性に乏しく，環境の影響を受けやすい。

③現実の把握は大雑把で未分化なものであり，適切な吟味，検討を欠く場合がある。

④情愛的なものを自己の中に受容できない。affective contact が不可能である。

⑤そのため，対人関係は表面的である。社会的協調性にも乏しい。

⑥情緒的に未熟である。

⑦内的な精神生活は貧困で，外界に対する自己表現がうまくできない。

人間は，様々な社会的環境，あるいは状況の変化の中で自己というものを認識し，柔軟的に自らの価値観，情緒を生活の中に表現していかなければならない。具体的には，それらは労働，芸術，対人関係などの中に反映されていくものであると考えられる。有機溶剤乱用者のロールシャッハ・テストに見られた少量のM反応，そして「火」「血」などの多くの未分化な色彩反応を通して，我々は，外的刺激に対するコントロールされた反応性の欠如からさらに進んで，「環境に対する自己表現の病理」を感じずにはいられなかったのである。彼らにとって，有機溶剤乱用は自己表現の歪曲された形であり，また，16例中4例に認められた自傷行為は，事例で述べたように，そういった状況の中での「自己」の極限的確認行為であったのかもしれない。

謝　　辞

本論文を終えるにあたり，ご指導，ご校閲くださった広島大学医学部神経精神医学教室更井啓介教授および国立呉病院精神科岡本輝夫医長に謝意を表します。

参 考 文 献

1）片口安史：新心理診断法．金子書房，東京，1976.
2）河合隼雄：臨床場面におけるロールシャッハ法．岩崎学術出版社，東京，1968.
3）Klopfer B, Davidson HH: ロールシャッハ・テクニック入門（河合隼雄訳）．ダイヤモンド社，東京，1966.
4）中村希明：麻薬・幻覚剤・有機溶剤．神経精神薬理 3：419-425，1981.
5）小田　晋：非行少年における有機溶剤酩酊の精神医学的研究．精神医学 11：49-56，1969.
6）篠置昭男：異常体験下における特異なロールシャッハについて．関西学院大学人文論究 24：129-151，1974.
7）嶋谷勝弘：ロールシャッハ・テストによる親子関係の分析的考察．臨床教育心理学研究 6：17-25，1980.
8）竹山恒寿：有機溶剤　現代精神医学大系　15A，369-384，中山書店，東京，1977.
9）津久江一郎：覚醒剤中毒の臨床像．臨床精神医学 10：1177-1188，1981.
10）山脇成人，津久江一郎ら：多剤薬物乱用者2症例について―鎮痛剤・シンナー・覚醒剤．広島医学（投稿中）.
11）Yamawaki S: Clinical Investigations on 10 cases of Organic Solvent Abuse. Jpn J Alcohol & Drug Dependence（印刷中）.

（特別掲載）
（受付　1982－3－8）